令和６年度第４回さいたま市社会教育委員会議　次第

（第12期第６回会議）

日時：令和７年１月20日（月）
14時00分から
会場：市役所別館　２階
第７委員会室

１　開　会

２　挨　拶

３　議　事

⑴　報告事項

・　前回会議について

⑵　協議事項

・　第12 期社会教育委員会議 提言の作成について

４　連　絡

５　閉　会

令和6年度第4回(第 12 期第6回)さいたま市社会教育委員会議　出席者名簿

No.	氏　名	選出母体等	備　考
1	石川　敬史	十文字学園女子大学教授	副議長
2	石﨑　敬吾	さいたま市中学校長会	欠席
3	井上　久雄	青少年育成さいたま市民会議副会長	
4	今川　夏如	さいたま市ＰＴＡ協議会前副会長	
5	加藤　美幸	十文字学園女子大学学修支援員	
6	小林　玲子	公民館運営審議会委員	欠席
7	佐野　操	埼玉県家庭教育アドバイザー	
8	澁谷　知範	公募委員	
9	関根　広美	特定非営利活動法人さいたまＮＰＯセンター専任委員	
10	鶴ヶ谷　柊子	浦和大学講師	欠席
11	林　　弘樹	映画監督	欠席
12	藤田　成司	さいたま市立小学校校長会	
13	吉川　洋一	(公財) さいたま市スポーツ協会副会長	
14	吉沢　浩之	さいたま商工会議所常務理事	
15	若原　幸範	聖学院大学准教授	議　長

(50 音順)

(事務局)

1	辰市　健太朗	教育委員会事務局生涯学習部生涯学習振興課参事兼課長
2	玉城　伸	教育委員会事務局生涯学習部生涯学習振興課副参事
3	石田　悦子	教育委員会事務局生涯学習部生涯学習振興課長補佐兼企画振興係長
4	三村　悟	教育委員会事務局生涯学習部生涯学習振興課企画振興係主査
5	伊藤　智美	教育委員会事務局生涯学習部生涯学習振興課企画振興係主査
6	駒井　友里香	教育委員会事務局生涯学習部生涯学習振興課企画振興係主事

令和６年度第３回（第 12 期第５回）さいたま市社会教育委員会議　会議録

開催日時：令和６年 11 月 25 日（月）10 時 00 分～11 時 30 分
開催場所：市役所第二別館２階　教育委員会室
出席者名：【委員】若原　幸範議長、石川　敬史副議長、井上　久雄委員、
今川　夏如委員、加藤　美幸委員、佐野　操委員、
澁谷　知範委員、関根　広美委員、林　弘樹委員
【事務局】（生涯学習部）　佐野　公子
（生学習振興課）辰市　健太朗、玉城　伸、石田　悦子、管野　敬之
三村　悟、伊藤　智美、駒井　友里香
（生涯学習総合センター）井出　浩史
（資料サービス課）阿久津　玲子
欠席者名：石﨑　敬吾委員、小林　玲子委員、鶴ヶ谷　柊子委員、
藤田　成司委員、吉川　洋一委員、吉沢　浩之委員
公開・非公開の別：公開
傍聴人の数：なし

１　開　　会

２　挨　　拶

３　議　　事

(1)　報告事項

ア　前回会議について

令和６年度第１回会議の概要について、会議録に基づき説明した。

イ　第 66 回全国社会教育研究大会　茨城大会について

第 66 回全国社会教育研究大会茨城大会の概要について、管野主幹より報告した。

(2)　第 12 期社会教育委員会議 提言の作成について

ア　提言作成に関する質疑応答・意見

【質疑応答・意見】

＜林委員＞

これまでの会議では提言書を作成するためにワークショップを行ってきたが、提言が誰向けに出されて、どのようなアクションプランや事業を想定したものであるかを具体的な意図を確認したい。

＜事務局＞
　提言は教育長に提出されることとなる。提言の内容にもよるが、提言の中で具体的に踏み込んだ提案があれば、それを受けてやりますし、教育委員会事務局生涯学習部としてはいただいた提言を共有している。提言に基づいたアクションプランを作るということはしていないので、提言内容の反映が見えにくいこともあるが、いただいた提言を真摯に受け止めて、事業への反映に生かしている。

＜林委員＞
　社会教育は何をしているのかと訊かれた際に、社会教育の理念などを説明することはできるが、生涯学習の意味や意義を理解してもらえない。そもそも、市民に向けて生涯学習への参画を促していくことが重要であるとして会議を行っているが、会議自体の説明も難しく感じるところがある。今回だと働く世代にどのように働きかけていくかという具体的なコンセプトを持って行っている会議なので、提言を出したときに提言内容を受けて実際に対応できる体制などがあるのかを確認したかった。

＜若原議長＞
　社会教育や生涯学習の理念がなかなか伝わらないということは我々の中でも長くテーマとなっていると思う。提言をする上で、市民に我々が考える理念をどのように伝え、理解できる施策にしていくのかということも含め議論したいと思う。

＜林委員＞
　生涯学習ビジョンというものがあり、ビジョンの考え方を深めていくというのもいいが、ビジョン自体が分かりにくいと市民には届きにくい。行政側が具体的にどのような姿勢で他の委員の皆さんもどのように考えているのかを改めてお聞きしたかった。

＜若原議長＞
　さいたま市の場合は社会教育計画に代わってビジョンを作成している。このビジョンがいつの実現を目指してつくられ、どのように実現していくのかを改めて確認しながら、議論やまとめをしていきたいと思う。

＜加藤委員＞
　林委員の意見を聞き、理念や仕組みは対象を細かく絞り、具体的に作ることができると良いと思った。

＜若原議長＞
　今回、働く世代とは誰なのかということも含め、排除される人が出ないようにあえて厳密

な定義をせずに広く定義して議論を進めてきた。最終的に提言としてまとめていく中でそれぞれのアイデアが出てくると思うので、そのアイデアが誰に向けてのものなのかを具体的にイメージしながら議論をしていきたいと思う。

イ　提言内容発表

全委員が提言内容について、一人ずつ意見を提示した。

【意見】

＜若原議長＞

大人であっても学ぶことや活動することを楽しめるような要素があると良いので楽しさを大切にしていきたいと思う。

繋がり方としては世代や職業を含め、多様な人たちが繋がりやすい緩やかな繋がりを大事にすることが重要である。

また、学びや教育が個人化しているように感じる。個人のスキルを高めていくことも重要だが、学びにより知識を身につけ、成長することは個人の出来事ではなく、地域や社会の財産となるものであるので、改めて学びの持つ公共性を意識して提言の作成に取り組んでいきたいと思う。

さらに、働き方も多様化しているので、働く世代を画一的に捉えるのではなく、多様に捉える視点を大事にしたいと思う。

＜井上委員＞

働く世代の生涯学習と地域活動への橋渡しということで、働く世代が自治会の活動や地域活動に参加することは難しいと感じているが。私が自治会長を務める自治会で子育てや、教育など共通の悩みを持つ人々をターゲットとした組織づくりをしたところ、新たに子育て世代が入ってきた。共通の話題で集まりを立ち上げ、コミュニケーションを図ることで、地域の繋がりができ、個人の成長にも繋がると感じた。

また、自分たちの課題を自分たちで見つけることで継続して活動を進めることができると感じている。

＜今川委員＞

実感という要素が重要であると感じている。自分たちの活動が自分や他者、地域のためになっているという実感が活動の継続に繋がっている。

地域や人と関わるところから様々なことが始まるので、入り口やきっかけは大切であると思う。

また、生涯学習や社会教育は人生において重要なものであると実感しているが、同じように実感を持つ人はかなり少ないと感じていて、身近な人にしか生涯学習や社会教育の重要性を伝えることができない。人々の様々な場所での様々な取組が重要で生涯学習のきっか

けとなるものであるため、その活動や取組を繋げていくことが大事であり、社会の歴史や未来のことを含め考えられるビジョンを示すことが重要で課題でもあると思う。

＜加藤委員＞

子育て中の親御さんなどは学ぶ必要性があるのでそれがきっかけになる。しかし、学ぶ意欲があっても、学びたいテーマがないと学ぶことができないので、多様なテーマが必要であるとよいと思う。

繋がりという点では口コミが最も効果がある。働く世代となると、駅の近くで学ぶことができるような場があったり、朝の時間帯で活動ができたりするとよいと思う。

また、図書館は多くの世代がいるので、デジタルの情報や本以外の情報があるときっかけや仕組みづくりになると思う。公民館も様々な事業を行っており、人々が集まる場所なので、公民館が拠点となり、すでにあるイベントを活用することで活動が継続されていくのではないかと思う。

さらに、防災は自治会などを含めて人々が参加する場なので、このような場を活用して他の活動に誘導することができると考える。

最後に、働く世代は子どもの活動に引っ張られて親も活動に参加するという傾向があるので、コミュニティスクールなども活用できると良いと思う。

＜佐野委員＞

学びたい人がどのような学びをしたいのか、声を集めると良い。せっかくのリカレント教育なので、学びを通してウェルビーイングを感じ、自身の夢や地域に繋がり、根付いていくと良いのではないか。

また、既存の団体が後継者不足で悩んでいるという話を団体の方から直接伺う機会があり、このような団体をこれからも継続し繋げていくためには、どうしたら良いのかとも考えた。

地域のリソースを生かして、学校ではチャレンジスクールが実施されたり、公民館を利用しての活動があったりするが、このような活動や地域のボランティアの情報が地域にいながら入らず、次の活動に繋がっていかないということがあると思う。

＜林委員＞

働く世代の生涯学習をどう理解していただくか、地域活動への橋渡しをどのようにするかということで、これまでのワークショップを振り返ると、何をやるかよりも誰がやるかということが重要であると感じた。そこで、プロの職員としてのブリッジパーソンやコーディネーターやこれらの人々を育成する人材が必要である。

生涯学習は多岐にわたるが、生涯学習ビジョンや公民館ビジョンにも入っている「地域づくり」という部分がわかりやすく、学んだものを地域に役立て公共性に繋げていくという面

では「地域づくり」で様々なことができると思う。その中で、ブリッジパーソンなどの存在が重要で、役割として登録するだけでなく、プロとして育成する学習の場をつくり、市民にも存在や具体的な役割を伝えることをしないと説得力がないと感じた。

以上を考えると、市長部局との連携が必要だと思う。人材が必要という面で同じ課題を抱えているので、定期的にブリッジパーソンなどの人材を育成することを考える会議や情報交換などを行っていただきたいと思う。

人が重要であるので、人について特化した提言にしても良いと思った。

＜関根委員＞

活動する人々を支えるために組織や所属を超えた全体を把握することができるサポート役が必要であると感じた。そして、活動をする人もサポートする人も無理のない時間で負担なく活躍できる場やどきどきわくわくするような場を作り、必ず何かの気づきとなる場にすることが大事である。次もまた何かをしたいという思いが活動の継続に繋がると思う。

また、介護や子育て、防災など、自分自身が当事者にならないとわからないという人も多い中で、その以前から活動をしている人もいるので、このような人たちを繋ぐコーディネーターが必要であると感じる。

さらに、自分自身の持つスキルを生かすことのできる場を作ることができると良いと思う。

＜澁谷委員＞

働く世代の学習をコーディネートする窓口支援の機能が必要であると感じた。働く世代が地域活動に繋がる仕組みづくりに関しては、生涯学習を通じた社会教育として、国の提言で「ウェルビーイング」という言葉が挙げられているので、これを具体化することができると良い。生涯学習の良さとして人と人との繋がりが指摘されているので、地域の取組み方針や事例を具体的に示すことでイメージが湧きやすくなる。

きっかけづくりに関して、働く世代は時間の制約が生涯学習に取り組む上での課題になるとアンケート結果でも紹介されていた。活動のしやすい時間帯の配慮や Web 会議の活用など柔軟で多様な場づくりがされると、働く世代の参加も促進されると思う。

働く世代が地域活動に繋がる仕組みづくりに関して、例えば地域の学習活動からスタートとして、続いて大学の公開講座や社会人向けの地域活動に関わる学習プログラムに参加するなど、生涯学習のステップアップの仕組みがあると良い。生涯学習を提供する組織や団体が地域活動への参画を促進するための具体的な連携が期待される。

働く世代の学びの継続に関しては、学びのステップアップの仕組みに加え、学習者間の交流にも一層の配慮があると良い。シニア世代向けと比較すると、働く世代向けの生涯学習プログラムでは、学習者間の交流にあまり力点が置かれていないように思うので、市内にとどまらず、県や全国、更には世界の学習者間の交流促進をも視野にした学び合うコミュニティ

の形成に配慮されると良い。

さらに、地域活動に繋がる仕組みづくりに関して付け加えると、町内会や自治会をはじめとする地域関係団体との繋がりが重要である。しかし、働く世代、更には新規転入者などの場合には、古くから活動する地域関係団体に新たに入ることは難しい印象もある。生涯学習を推進する機関との連携を図り、転入者を含む働く世代の意欲のある人が気軽に参加できる枠組みが整えられ、地域関係団体のニーズ把握をもとに、所要の学習プログラム等を展開することで、地域活動への参加促進にも繋がり、良いと思う。

「さいたま市生涯学習フェスティバル」のような地域のイベントを通じて、働く世代の興味や関心を引き出すような継続した取組みも重要と感じた。

最後に、国の指針では障害者について言及がされているが、障害を抱えた人向けの生涯学習や社会教育を福祉関係機関と連携して学習プログラムに展開することが重要である。また、働く世代が障害者の生涯学習を促進する支援者としての立場で、所要の専門スキルを学ぶような学習機会が提供されると国の指針がより実効的なものになると思う。

＜石川副議長＞

まず、核となるのは人であると考えた。小さな組織をまとめることや地域の繋がりをどのように作っていくのかということの核心には、人の力や思いがあり、個が仲間を作り、その仲間から自由でボーダレスな繋がりが広がるため、人から人への繋がりの連鎖がある。

また、私らしく・自分らしくという考えがキーワードとして挙げられると思う。学びをすることが目的でなく、楽しさの中で生まれたスパイラルや行動が結果として学びになるということが働く世代の生涯学習におけるポイントである。好きなことや関心のあること、学生時代に学んだことなどを社会に出て再発見するということがきっかけとなり、学びがスタートするのではないかと感じた。

さらに、中高生だけでなく、ドロップアウトした方への学びの保障の仕組みづくりが公でどのように考えられていくのかが重要である。

ウ　意見交換

自身の発表の補足、互いの提言内容についての意見や質問、話し合いを行った。

＜林委員＞

皆さんの意見を聞き、納得した。体験することが貴重で重要であるとされている時代の中で、働く世代を含めて人々が体験をできる場を作ることが重要である。体験の中に気づきがあり、結果として学びになるということもあるが、普段の仕事や自分のできること以外にも様々な体験ができるということを届けられると分かりやすいと思う。

＜若原議長＞

体験や実感は重要なキーワードであると思う。普段から生涯学習活動をしていると社会教育や生涯学習の価値や意義はわかるが、話を聞くだけではわからないと思うので、実際に体験する場を設け、豊かにするということが重要であると考える。

＜加藤委員＞
皆さんの話を聞き、コーディネーターが一番重要であると思った。さいたま市は公民館に社会教育主事や社会教育士が多く配置されているが、市民に周知されていない。活発に事業を行っている場所もあるが、もう少しコーディネーターの役割を担う人々に活躍をしてもらいたいと思うので、実行委員会や協議会など、コーディネーターが地域の人々を巻き込んで活動する仕組みができると良いと考える。

＜若原議長＞
皆さんのおっしゃる通り、社会教育職員の本来の役割はプロフェッショナルとしてのコーディネーターである。プロとして力を発揮するためにどのように仕組みを整えるかが行政課題であると思うので、提言書に盛り込んでいくとよいと思う。

＜林委員＞
社会教育主事の方々と関わる中で活躍の場がないという話も聞いている。生涯学習をコーディネートするプロの力を生かすことができるように改善するだけでも大きいと思う。

＜若原議長＞
かつては社会教育の場でしか機能しなかった資格が、現在では幅広く使うことが出来るようになっているので、林委員がおっしゃっていたように市長部局との連携などで行政分野でも学習のサポートや人を繋げることができる。取組が広がると連携が深まると思うので、このあたりも考えていきたいと思う。

＜佐野委員＞
公民館で社会教育指導員の方と関わる際に、地域のリソースを非常によく把握していると感じるので、それが生かされないことはもったいないと思う。

＜若原議長＞
本日も活発に意見が挙げられたので、意見を整理しながら、提言をまとめていきたいと思う。

エ　本日のまとめ

＜石川副議長＞

先ほど林委員が体験の重要性をおっしゃっていたが、それぞれの生活圏や生活リズムの中でできる小さな体験から何かが始まるのではないかと思った。

また、働く世代の生涯学習と地域活動への橋渡しというテーマを改めて振り返るとやはり橋渡しとは何か、生涯学習とは何かという考えにたどり着くと感じた。橋渡しとは何かを考えたときに、結果として学びに繋がったり、繋がりに結びついたり、体験ができていたりなど参加や参画に結びついているということが考えられた。

さらに、このような参加や参画、小さな体験からドロップアウトされた方など、取り残された人々がいるのではないかと感じた。身体的に障害がある方や社会的に障壁のある方に手を差し伸べていくという視点も忘れてはいけないと思う。

＜若原議長＞

意見交換や副議長の話でも挙げられたことだが、改めて体験を通した学びが重要である。学習や教育に対するハードルは高く学校型の教育というイメージが強いが、それとは異なる体験や活動を通して学ぶことができることが社会教育の特徴だと思うので、この特徴を改めて形にしていくことが重要である。そして、何かのために学ぶというよりは、体験や活動を通して学びがあることに気づき、その価値にも気づくことができる仕掛けが必要であると改めて感じた。

さらに、皆さんもおっしゃっていたように社会教育士などのコーディネーターの役割は社会的、政策的に重視されていると思うのでさいたま市の地域条件に即してどのように形にしていくかが重要である。さいたま市は公民館や社会教育施設が非常に多く設置されているので、これを生かし、働く世代が繋がることができるように機能していくことが重要であると改めて感じた。

本日出た意見を見直しながら提言書の作成を進めていきたいと思う。

4　閉会

つながり

働く世代が生涯学習を身近に感じるきっかけづくり

- ゆるやかなつながり
- 働く世代の学習をコーディネートする支援者
  公募の仕組み
- 働く世代 ＝ 子育て世代 ＝ 共通話題 ＝ 子どもの成長 教育 親の悩み
- リカレント教室
  ウェルビーイング
- 口コミ
- 興味（夢）
- こんな学びがしたいという声を集める方法 周知 ネットワーク化
- 入口 きっかけ

働く世代が地域活動につながる仕組みづくり

- 学校 コミュニティスクール の活用
- 子どもと共に ネットワーク作り
- 生涯学習・社会教育を通じて ウェルビーイングとは何か 明確化、自己の目的

場

- 小さなつながりから 集まり はじまる
- 駅前（入学）
- 学ばなければならない 必要性
- 朝活
- 子育て中の親
  学び　必要
- 働く世代の時間の制約を感じた
  ・「時間(夜間・土日)」の配慮
  ・「場(集合・Web)」リアルタイム・オンライン
- 地域・人 かかわりからのスタート
- 図書館 多世代がいる本以外も
- 公民館 拠点場として
- プロジェクトの内容で人は集まる、当事者子育て、防災、介護など
- 無理をしない 楽しんでする ワクワク ドキドキ
- 負担のない時間の中でのミーティングの場 SNS 集まっての会議
- 自分のスキルの発揮できること
- 子どもがいるならそのつながりで
- 高校・大学等関係機関との連携
  ・地域の場からの学習のステップアップ
  ・学ぶ場

継続の重要性

- 自分らしく 組織・団体 らしさ 活動 学び
- たのしさ 学びのスパイラル
- 祭りなどすでにある イベント 活用
- 誰が　やるか 誰と　やるか **ブリッジパーソン コーディネーター** プロフェッショナルな職員が必要 またそれに準ずる人の育成
- 補足 (地域づくり)という入口が一番分かりやすいのでそこに特化しても良いのではないか
- ・地域 ・人 ・行政 ・組織化 小さな連携
- 人と人との つながり 個→なかま
- 自由 ボーダレス 多世代
- 「楽しさ」を大切に
- 1日限りの講座 学びのステップアップの仕組み さいたま市を超えて、県、関東、全国、世界へ
- 新組織の編成 ＝ 共通の課題の取り上げ ＝ 自分たちで立案計画 ＝ 共に成長する
- 次のステップに進んでいこうとする気持ちになるような
- 新しい気づきがあるように
  ＜実感＞
- 実感
- 防災の イベント 他の活動へ
- 情報 デジタル 活用
- 地域活動団体（福祉・環境等）のニーズ把握 →"学習・研修" アウトソース 社会教育
- ・町内会、自治会への働きかけ
  ・オープン化
- 活動する人のサポート役 組織・所属を超えた
- どんな「体験」ができるか 明確化 「体験から気づき」

学習者として

- 学びの 公共性
- 「働く」ということの多様性
- 興味・関心を引き出す 生涯学習フェスティバル
  ・働く世代の学ぶ両立で「ウェルビーイング」
- 現在の組織の改革 ＝ 多様性 ＝ 学びたい意欲 多様なテーマ
- これまで興味・参画なかった人を巻き込む方策の試み ワクワク感 学び合い ランチ
- 個
  ・好き
  ・関心
  ・再発見
- いつ どこで 誰と 誰が 何を どうするのか 具体的
- 公
  ・学び
  ・仕組みの保障
- ・生きる
  ・生活
  ・考える
- 伝統文化活動（地域）と繋げていくには
- そもそもの 有用性？ なんのために？ なぜ大切？
- 市長部局と「地域づくり人材育成・プロフェッショナル」 連携・融合
- ・発達障害等を有する者への生涯学習支援（チャレンジスクール）
  ・ソーシャルスキルトレーニング
  福祉党との連携
  ・支援者としての働く世代の参画

資料１

第 12 期社会教育委員会議　提言案
Ⅰ「働く世代の生涯学習と、地域活動への橋渡し」を実現していくための方策について

1　協議テーマについて

高齢者に対しては、講座やイベントなどの様々なアプローチが行われている一方、働いている方や子育て中の方、若い世代の方への取組は十分に進んでいない。

→　協議テーマを、「働く世代の生涯学習と、地域活動への橋渡し」とした。

留意事項

・生涯学習は生き方そのものであるので、その中に自分たちがいることを実感する必要がある。必ずしも「働く世代」が生涯学習に携わっていないものではない。
・「働く世代」の定義を明確にしすぎると排除される人が出てしまうので、厳密に定義せず、20 代から 50 代くらいの世代を念頭におき議論を進める。

2　協議課題について

協議テーマを実現するために注力すべき課題として、会議の中で提示された意見を集約した結果、２つの協議課題として整理された。

■ 協議課題1「働く世代が生涯学習を身近に感じるきっかけづくり」

・ 仕事や暮らしの中での成長そのものが、まちや社会全体の成長に資する生涯学習そのものである。地域社会の中で自己実現や人の輪を広げ、地域社会の発展につながることを実感してもらえる生涯学習のあり方を考えることが重要である。
・ 関心のあることから参加し、困りごとなどが少しでも解消されることで、地域や社会とのつながりを実感し、社会参加が進むのではないか。
・ 「仕事に役立つ学び」や「人生を本当に豊かにしてくれる」ものであると感じることができれば、生涯学習の意義や意味の素晴らしさに気付くのではないか。
・ 学びの中での喜びは独りでも得られるが、共に学ぶことで得られる独特の体験もある。そして、結果として地域の思わぬつながりができることがある。
・ 「きっかけづくり」や「顔の見える参加しやすい仕組み」の重要性が、生涯学習の推進においていかに重要であるか議論する必要がある。

■ 協議課題2「働く世代が地域活動につながる仕組みづくり」

・ 学びや成長を実感することは、「個」や「私」に留まらず、地域社会への「参加」や「つながり」を発見することに繋がるのではないか。
・ 適切な場や環境があることで、学びやつながりが形成され、結果として地域社会への参加が促進され、地域の文化創造へとつながる「学びの循環」が形成される。
・ 生涯学習を通じて、働く世代の人々を早期から地域社会に包摂することは喫緊の課題である。
・ 「まず参加してみる、そのためのきっかけの場づくり」が重要である。

3　ワークショップを通じて見えてきたキーワード

・ 提言を作成するにあたり、さいたま市内で活動している方々の事例を参考として「働

く世代の生涯学習と地域活動への橋渡し」を実現するためのヒントを探ることとした。

・ ワークショップ（全３回）
　１回目　地域活動団体（合同会社ババラボ、シビックテックさいたま）
　２回目　チャレンジスクール事業
　３回目　ＮＰＯ団体（認定ＮＰＯ法人みんなの夢の音楽隊）

・ ワークショップの事例について検討を行い、さいたま市の生涯学習の参考となる要素や、新たに考えられる取組みを探る中で、４つのキーワードが見えてきた。
・ ４つのキーワードをもとに議論を重ね、協議テーマを実現していくための方策として、以下のとおりまとめた。

【4つのキーワード】
① 人と人を結びつける「つながり」について
② 地域活動につながる「場」について
③ 継続の重要性ついて
④ 学習者としての生涯学習について

４ キーワードをもとにした議論

協議課題1　働く世代が生涯学習を身近に感じるきっかけづくり

① 人と人を結びつける「つながり」について

○ 従来からある青年団等のような強固な仲間意識をもつようなつながりも大事だが、多様な世代・職業の人との緩やかなつながりを大事にすることがこれからは重要ではないか。
○ 働く世代も子育てなどの共通話題をターゲットにして人を集めることが可能ではないか。
○ つながりという点では「口コミ」が一番。口コミで言われたからやろう、となることがある。
○ 働く世代の学習をコーディネートする窓口や支援者が必要。
○ 公募の仕組やコーディネーターを育成する生涯学習講座があると、広がりが期待できるのではないか。
○ 親子参加型イベントの開催（親子での参加の機会を提供し、自然なつながりを創出）。
○ ＬＩＮＥやその他ＳＮＳなどのツールを活用し、働く世代同士が気軽に情報共有・交流できる仕組みを作る。
□ 産学の連携を強化し、企業プログラムや大学生の参加型のイベントを開催することで、人脈形成や同じ趣味嗜好を持つ人との交流につなげる。

② 地域活動につながる「場」について

○ 友達同士や仲間同士など、小さなつながりや集まりから始める、もしくは自分が興味のある何かに参加したり、市民講座に参加するといった小さなところから始めて、そこでつながりが生まれ、つながりが連鎖して場が形成され、その場からさらなるつながりが始まるのではないか。
○ 働く世代には、駅前に学べる場があると良いのではないか。

○（黄色の付箋）：ＷＳを振り返り提言に盛り込みたい内容
□（桃色の付箋）：新たに追加する提言内容（国等の動向を踏まえて）

○ 多様な学びの場を設ける。「朝活」「夜活」など、働く世代が参加しやすい柔軟な時間帯での活動の場を設ける。
○ オンライン勉強会や相談会を組み合わせたハイブリッド型イベントを開催し、多様で気軽な参加方法を提供する。
○ 「楽しさ」や「ワクワク感」を重視したイベント（例:「縁づくり市」「ホンネ会議」）を通じて、気軽に参加できる環境を整備する。
□ 子どもを様々な脅威から守るためのコミュニティ形成。
□ 産学の連携を強化し、学びの場を増加させる。独身者や子どものいない世帯が参加できるような、魅力的で興味深い学びの場を提供する。

③ 継続の重要性ついて

○ 「働く世代」をターゲットにすると、仕事に役立つイメージになりがちだが、学びや活動を楽しめる要素は必ずあった方が良い。
○ 次のステップに進む意欲が湧くような新しい気づきを実感できる場をつくる。
○ １回限りの講座ではなく、学びのステップアップの仕組があると良い。
○ 活動の目的を段階的な目標に設定することで、継続的な活動につなげる。
○ 「自分らしく」活動や学びを行うことで、楽しさと学びのスパイラルが生まれる。
○ 緩やかな参加を促し、負担感を減らす。
○ 「月１回の勉強会」や「年数回のマーケット」など、定期的なイベントを開催し、継続的な参加を促す仕組みを作る。
○ 活動内容や成果を振り返り、次回の活動へのモチベーションを高める。
○ さいたま市から県・関東・全国・世界へつながる学びの継続性を考慮する。

④ 学習者としての生涯学習について

○ 生涯学習フェスティバルの相川七瀬さん講演会で、学び残したことがあるかなという自分探しも含めて、生涯学習や大学院の勉強に取り組んでいるという話があり、これまで参加していなかった人を巻き込んだり、興味関心を引き出すようなワクワク感を伝える仕組みがきっかけになるのではないか。
○ 参加者が自身の活動を「生涯学習」として認識するきっかけを提供する。
○ 学ぶ側から教える側へ転じる機会を提供し、学びの循環を実現。
□ 学びや教育が“わたくしごと”化している。個人のスキルを高めることは大事だが、地域や社会の財産という観点が少なくなっている。学びの公共性。
□ 近年多様化する「働く」ということをどのように考えるか。
□ ＩＣＴや実務に関連するスキルを学ぶ機会を設け、働く世代の「学びたい」をサポートする。ＤＸ人材になるためのビジネスパーソンに必要なＩＴスキル（経産省による「ＤＸリテラシー標準」に準拠した内容の提供／副業のための知識やスキル）を身に着けるための学習を提供する。

協議課題2　働く世代が地域活動につながる仕組みづくり

① 人と人を結びつける「つながり」について

○ 働く世代は子どもがいると、子どもがきっかけになることがあるので、子どもと共にネットワークづくりを進めるのが良いのではないか。

○（黄色の付箋）：ＷＳを振り返り提言に盛り込みたい内容
□（桃色の付箋）：新たに追加する提言内容（国等の動向を踏まえて）

○ 「誰か」もしくは「何か」との関りから色々なことが始まっていると感じており、入り口やきっかけは大事だと思っている。
○ コーディネーターや地域リーダー、専門家等の活用。
○ 企業や行政との協力を強化し、多様な人が参加する仕組みを構築する。
□ 生涯学習を通じた社会教育として「ウェルビーイング」という言葉が何度か出てきているが、そこをもう少し具体化する。
□ 自己の目的の達成や自分探しという目的で関わる人もいるかもしれないが、人と人のつながりが生涯学習の良さでもある。

② 地域活動につながる「場」について

○ 地域や人との関わりから物事が始まっていると感じる。
○ 公民館はいろいろな事業を行ったり、人が集う場なので拠点となると良い。新規に事業を行うのではなく、公民館で既に実施しているイベントを活用することでつながり、続いていくのではないか。
○ 無理せず楽しんで行う。ドキドキワクワクするような場を作っていく。
○ 自分のスキルを活かしたいという人が、自分のスキルが発揮できる場があると良い。
○ 誰がやるか、誰とやるかというブリッジパーソンコーディネーターとしてプロフェッショナルな職員が必要。また、準じる人材の育成も考える必要がある。地域づくりという入口が一番分かりやすいので、そこに特化しても良いのではないか。
○ 人の力が核心になる。小さな組織をどうまとめるかや地域同士のつながりは、やはり人と人のつながりで仲間を作り、仲間から自由でボーダレスな多世代のつながりに発展していく。人から始まりいろんな連鎖がつながっていく。
○ 子どもを介した地域活動の場を活用し、多世代交流を促進。
○ 子どもと大人が共に学ぶ場を設け、地域での協働の第一歩を支援する。
□ 大学等関係機関との連携で地域の学習からスタートし、学習のステップアップとして大学の公開講座等に参加する。また、逆に大学から地域活動に関わることで地域活動に繋がっていくのではないか。
□ ＩＣＴを活用した課題解決の場（例：デジタル相談室、公園×テクノロジー、本業でのＩＴ活用法など）を提供する。
□ 子どもがいない世帯も気軽に参加できる場をつくる。

③ 継続の重要性ついて

○ 防災イベントは自治会も含めて人が集まる。そのような既存の場を活用して他の活動へ誘導する。
○ 組織・所属を超えて活動する人のサポート役が必要である。
○ どんな「体験」ができるのかを明確化する。
○ 地域関係団体（町内会や自治会）との繋がりは大切なので、それら団体のニーズを把握していくことも重要ではないか。
○ 継続しようと思うのは「やって良かった」「関わって良かった」というような人や地域のためになっているという実感があるときである。
○ 環境の変化で一時的に活動を中断しても、再参加しやすい仕組みを整備する。
○ コーディネーターやボランティアの役割を明確化し、活動を支える体制を確立する。

○（黄色の付箋）：ＷＳを振り返り提言に盛り込みたい内容
□（桃色の付箋）：新たに追加する提言内容（国等の動向を踏まえて）

○ ボランティアへの謝金や表彰などを活用し、モチベーションを高める。

④ 学習者としての生涯学習について

○ 情報・デジタルを活用する。
○ 地域活動を「生涯学習」の場と認識する意識を醸成し、働く世代が主体的に参加するきっかけを提供する。
○ 働く世代が持つスキルや経験を活かせるプログラムを提供する。
○ 地域課題や社会問題をテーマにした学びを通じて、実践的な貢献ができるよう支援する。
□ 生涯学習や社会教育の有用性や「何のために行うのか」、「なぜ大切なのか」を実感している人が少ない。それらを実感している人が関わった人に伝え、繋げていくことが大事である。
□ 「好き」「関心」「再発見」といった興味関心を引き出すようなワクワク感を伝える仕組みがきっかけづくりになる。
□ 発達障害者等の生涯学習や社会教育の取組みが進んでいない。福祉機関と連携してソーシャルスキルトレーニングを実施し、学習プログラムの展開や支援者の専門性を学ぶ生涯学習の機会を提供することが国の指針の実効性を高める。
□ 中高生以外の大人も含めて、ドロップアウトした方への学びを保障する。

⑶ その他の意見

・ デジタル化やコロナ禍を経て、体験が貴重なものになっている。働く世代も体験したいと思っている。体験があるから気づきがあり、体験をしたから結果として学びになる。仕事や自分の普段の行動の範疇ではできないが、いろいろな体験ができるということを発信すると伝わりやすいと思う。
・ コーディネーターが一番重要である。公民館に社会教育主事や社会教育士が配置されているが、市民に認知されていない。社会教育主事がもっと活躍することで、コーディネーターが実行委員会や協議会に地域の人を巻きこむ仕組みができればよいのではないか。
・ 公民館の社会教育主事や図書館の司書などのプロの力を生かせていない現状を改善するだけでも大きいのではないか。
・ 社会教育指導員は地域のリソースを把握しているので、それが生かされないのはもったいないと感じる。

○（黄色の付箋）：ＷＳを振り返り提言に盛り込みたい内容
□（桃色の付箋）：新たに追加する提言内容（国等の動向を踏まえて）

資料２

提言における「働く」ことの意味について理解を深めるために

１「働く」ことの意味について

「働く」状況	結果	ビジョンとの関わり
自分のために「働く」	自己実現 （自分らしく生きる）	人づくり
他者のために、 他者と共に「働く」	相互承認／協働 （共に生きる）	つながりづくり
社会・地域のために 「働く」	主体形成 （共に自分らしく生きる世界を創る）	まちづくり

２「働く」範囲について

⑴ 狭義

・ 職業・仕事等

⑵ 広義

・ 家事、子育て、介護等
・ 地域活動
・ ボランティア

３「働く」場について

「私」と「公」の中間に位置づく「共」の領域（≒地域）(※) を、「働く世代」の参加によっていかに豊かにするか。

(※)「共」の領域：資源や課題を共有する場、生活・活動を共にする（協力・助け合い等）場

○「働く」場の例
- ・職場
- ・家庭
- ・地域

４「働く」ことと生涯学習の関係について

・ 「働く」ための学習
・ 「働く」ことを通した学習
・ 学習成果を活かして「働く」
・ 他者の学習のために「働く」